



河明求 (Ha Myoung-goo/ハ・ミヨングー) ステップス初個展である。河は 1983 年韓国生まれ、2009 年に慶熙大学校芸術・デザイン学部陶芸科卒業 (韓国)、2012 年に英国王立芸術学校 (RCA) 交換留学過程修了 (ロンドン・イギリス)、2013 年には京都市立芸術大学美術研究科工芸専攻 (陶磁器) 修士課程修了 (京都) 現在、丸沼芸術の森 (埼玉) にて制作を続けている。河は韓国、ロンドン、関西、関東と、陶芸を求めて渡り歩いてきた。日本語も上手い。

河は今回、皿や湯呑など実用的な陶磁器を 22 点、抽象陶芸を 11 点、イラストを 4 点展示した。陶磁器と陶芸は陶のみが 2 点、その他は陶に漆、イラストは紙にインクが 3 点、色鉛筆を加えたものが 1 点である。陶磁器は非常に使い勝手が良さそうである。手に馴染み、色合いも日本では見られない独特の世界観がある。「しつらへ」を日本の発想とすると和を持ち個を消すことになるが、河の作品は設えと共にヨーロッパ的な「個」の強さを携えている。

抽象陶芸も陶磁器同様、それぞれが個別の色彩を帯び、明確な形を保つ。それは河の工芸的技術の高さを示している。高温で焼かれた作品群は、見た目は柔らかくそれでも強靱な表層を形成している。「潰す」という形は伝統に対する反抗、日本の 50-60 年代に流行した所謂「前衛絵画」「前衛書」「前衛活け花」を想起させるが、河は当て嵌まらない。

河は情感よりも、冷徹な空間性を作品へ投入する。その空間性は個としての造形性を超える力を備えている。つまり河の作品は陶磁器の様式、陶芸の方法を保持しながらも、周りを包み込む空間までも巻き込み、構築する要素を持っているのだ。利休の椀の思想を保持しながらも、その革新性を更に更新しようとしている。日本で 1980 年代に興隆したインスタレーションはバブル期の広大な土地を「使用」しようとし、空間を「生み出す」発想は無かった。

利休のような空間の創設の機運を、河は齎している。河の作品に造形性の超克があるとすれば、同時に絵画的発想に満ちているといえることができる。壁に掛けられた平面の作品を見て思ったのではない。予てから絵画は空間性のみを追究してきた。空間性に優れた彫刻、立体、インスタレーション、建築ほど、より絵画に近づいていくのと同様である。河の作品はそういった分類を無化する現代美術の在り方が内在化されている。陶器が絵画であって不思議はない。

そう感じながらドローイングを期待して事務所に行くと、河のイラストを見て驚愕した。このイラストこそ個人の内面を周りの雰囲気と共に封じ込める陶芸の世界そのものだからだ。陶磁器、抽象陶芸、イラストがそれぞれの役割を互いに入れ替えて存在する。この面白さは、やはり個々の作品が自立している証左に他ならない。

